

ゲット・ア・チャンス

特許庁技術懇話会 常任委員 村上 聡

巻頭言



新年明けましておめでとうございます。今年が特技懇会員の皆様にとって素晴らしい年となりますように心よりお祈りいたします。

また、昨年の11月26日に、特技懇創立70周年を記念し、シンポジウム及び懇親会を開催させていただきましたが、シンポジウム参加者が約400名、また、懇親会参加者も約200名と、会場もほぼ満席となり、盛況のうち、無事終了することができました。これも、特技懇正会員をはじめ、庁内外の関係者各位のご協力の賜であり、この場を借りて、常任委員、幹事、スタッフを代表しまして、改めて厚くお礼申し上げます。

さて、本年度も残り少なくなってきましたが、本年度の特技懇のキーワードは、これまでも特技懇誌においても何度も紹介させていただいておりますとおり、「創立70周年」ということになるかと思えます。そして、この「創立70周年」という節目をどのように捉えるかは様々であるとは思いますが、少なくとも、何らかの「機会」になることだけは確かではないでしょうか。

我々の普通の生活を振り返っても、忙しい日常の中では、ふと立ち止まり胸に手を当ててこれまでの歩みをじっくりと見つめ直すといったことはもとより、自分が今いる場所がどこであるのかを確認することすら、年末年始といった機会でもないとなれば、さらに、「変化する」となると、社会人デビューや転職、結婚といった機会を逃すと、思い切った「変化」はなかなか難しいものです。プロ野球においては、広島東洋カープの赤ゴジラこと嶋重宣選手が何の前触れもなく突如として大変身し大活躍して賞賛されたということがありますが、通常の生活においては、特段の機会もなくある日、突然、大変身してしまうと、周りの人は心配するのではないのでしょうか。

特技懇としては、この「創立70周年」を、単なる「節目」としてではなく、これまでを見つめ直し、変化するこ

とのできる貴重な「機会」、さらには「チャンス」として捉えたいと考えています。そして、このチャンスに、我々は新たなチャレンジとして、冒頭でも述べましたとおり、シンポジウムを企画し開催しました。このシンポジウムにおいては、庁内外に対し、知的財産行政にかかる現状認識や問題の提起を行うとともに、特許庁、また、審査官の役割を広くアピールできたものと考えています。また、懇親会についても、今年度は、これまでとは趣向を変え、新人歓迎を中心とした特許庁関係者によるよりアットホームな懇親会を昨年6月に開催するとともに、シンポジウム開催時にもより一層の知的財産に係わる人々の交流を深められるよう一般参加も含めこれまで以上に多くの有識者に参加いただき懇親会を開催しました。一方で、これまでの特技懇活動についても、これを機会に、見つめなおし、しっかりと承継してきたつもりです。

このように、特技懇としては、この創立70周年をチャンスと捉えより一層の充実した活動ができるよう努力してきたつもりですが、特技懇会員の皆様には、是非、この特技懇を「チャンス」の場として、積極的に活用していただきたいと考えています。多忙な日常の中では、いろいろと自己研鑽をしようと思ってなかなか一人では始めづらかったり、また夢中になれるものを見つけられなかったりすることも多々あるのではないのでしょうか。このような時には、是非、特技懇をきっかけの場として有効に活用していただきたいと思っています。特技懇としても、いつでもだれでも気軽に特技懇活動に参加できるような雰囲気作りを努めるとともに、自己研鑽をしていく様々な場を積極的に提供していきたいと思えます。

最後になりましたが、特技懇としましても、今後とも、変えるべきところは大胆に変え、また、守るべきところはしっかりと守り、特技懇活動をより一層充実したものにしていきたいと考えていますので、積極的なご意見、ご提案、更には、お気軽なご参加をお待ちしています。